

英米文化学会会報

#008 Published 30 August 1991 Not for sale

★英米文化学会第九回大会のお知らせ★

日時：平成3年9月7日（土）
場所：拓殖大学茗荷谷校舎（地下鉄丸の内線茗荷谷駅下車徒歩3分）

受付開始 9:00

総合司会 石川郁二（城西大学）

開会式 9:30～9:45

挨拶 英米文化学会会長 勝浦吉雄

研究発表 9:50～12:10

1. 9:50-10:30

George Herbert と『詩篇』 -- Sidney の翻訳と関連して

発表者 山根正弘（創価大学）

司会 中村 豪（昭和女子大学）

2. 10:40-11:20

アイデンティティの喪失への危機感 -- Paul Auster 論

発表者 君塚淳一（神奈川大学）

司会 相良英明（鶴見大学）

3. 11:30-12:10

馬を愛した女 -- D.H. Lawrence の『セント・モー』から

発表者 須田理恵（日本大学）

司会 相良英明（鶴見大学）



昼休み 12:10～13:10

研究発表 13:10～14:40

4. 13:10-13:50

生徒の自発的発言を促す教材づくり

発表者 藤田牧子（上鶴間高校）

司会 馬嶋治男（拓殖大学）

5. 14:00-14:40

日米文化にみることばと摩擦

発表者 古澤寛行（昭和女子大学）

司会 高取 清（文京女子短期大学）

パネルディスカッション 15:00～17:30

テーマ：英和辞典の現状と展望

司会 深井宏一（立正大学）

講師 田島伸悟（東京純心女子短期大学）

大石五雄（成蹊大学）

石田雅近（清泉女子大学）

閉会式 17:30～17:40

閉会の辞 英米文化学会副会長 名和雄次郎（拓殖大学）

懇親会 18:00～20:00

会場 味処 糸戸屋（文京区大塚3-1-12コグマビル1F TEL 3945-1188）

司会 五味田幸夫（玉川大学）

挨拶 英米文化学会副会長 深井宏一（立正大学）

英米文化学会第9回大会事務局

〒101 千代田区神田駿河台1-8-13 日本大学歯学部 佐藤研究室

TEL 03-3219-8160

【分科会委員会からのお知らせ】

◆分科会の現状報告

分科会選取に関する御返答は、次頁の通りです。御協力有難うございました。(1)から(11)までは分科会準備委員会が設定したのですが、(12)から(20)までは新たに会員が希望したテーマ(グループ名)です。御返答を拝読しますと、会員皆様それぞれ公私共に御多忙の様子がよく分かりました。ただし、分科会に期待する声も確実にあります。生みの苦しみと言いますか、もう少し様子を見なければなりません。分科会の中心的存在(リーダー)が決れば、活動も軌道に乗るものと思われれます。分科会活動は、自然発生的に始動して行くのが理想かと思えます。再度会員皆様の御協力をお願い致します。9回大会の折りに話合いの時間を設けたいと思っています。(五味田)

<英米文化学会分科会希望調査中間報告> (御名前は御返答を受け取った順です)

- (1) 文学と性 室岡 博、五味田幸夫、相良英明、須田理恵、君塚淳一、銀川啓介
- (2) 文学と犯罪 室岡 博、高取 清、小林 弘、倉崎祥子、五味田幸夫、宮崎敬子、銀川啓介
- (3) 戦争と文学 室岡 博、佐藤治夫
- (4) 死と文学 室岡 博、小林 弘、山根正弘、宮崎敬子、吉田真理子、君塚淳一、相良英明
- (5) 教材としての文学 室岡 博、田島伸悟、高橋祐子、原田酒佐人、秋山康三、倉崎祥子、名和雄次郎、須田理恵
- (6) リーディングの要領 室岡 博、岸山 睦、秋山康三、伊澤 章、馬嶋治男
- (7) ティーム・ティーチングの方法 片岡美恵子、成田敏彦、新妻 紘、村上 温、石井有美
- (8) オーラルコミュニケーションの指導法 高崎文雄、成田敏彦、新妻 紘、平良達夫、平川敦子、伊澤 章、石田雅近
- (9) 英語教育と目標設定 片岡美恵子、成田敏彦、茂住實男、新妻 紘、伊澤 章、石井有美、馬嶋治男
- (10) 音声指導の法則化 鈴木俊二、成田敏彦、石田雅近
- (11) テープ/ビデオの教室における利用法 高崎文雄、高橋祐子、成田敏彦、石井有美
- (12) プリティッシュ・スタディズ、日英文化比較 高崎文雄
- (13) 文 法 青柳峯生
- (14) 文学批評について 吉田俊実、須田理恵
- (15) 文学と自然 高橋祐子、相良英明、須田理恵
- (16) アメリカ文化思想 古澤寛行
- (17) 地域と文化と文学 大島良行、倉崎祥子
- (18) 文学と女性 倉崎祥子、須田理恵
- (19) 文学と庶民 宮腰 晃
- (20) 社会言語学 平川敦子

◀学会の英語名称決定▶

長らく懸案事項となっていました。学会の英文名称が以下のように決定しました。

The Society of English Studies (略称 SES)

封筒もライトブルーに統一しました。裏面には、各種委員会の連絡先が入っており、小さな四角にティックが入っている委員会が発送元となっておりますので、お受け取りの方はお間違えのないようになさってください。

(事務局からのお詫び：上記の予定でしたが印刷が間に合いませんでした。次回の郵送物をお楽しみになさってください。)

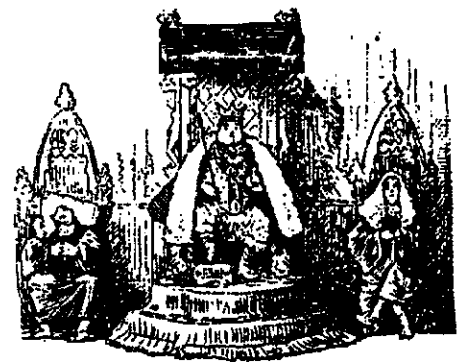
矢代幸雄氏の数多い著述の中に『日本美術の恩人たち』（文藝春秋新社、1961年）という随筆集がある。私にとってこれほど魅力があり重みのある本はない。それが年を経るにつれて次第にそうなる行くのである。氏は生前、世界を股に掛けて、特に戦後は東奔西走、八面六臂の活躍をされた世界的な美術史家であった。しかし、氏のヒューマン・ドキュメントである本書も、惜しいことにその後絶版になったらしく、完全な稀覯本となり、一般の目に触れなくなったので、この機会に紹介しておきたい。

全体は十二章、内容は欧米各国の著名人、つまり日本の美術や古典、ないしは日本そのものを、こよなく愛した人々と氏との交遊から生れた厚い友情の記録であるが、これほど読む者を感動させ、繰り返し読みたくなる本も少ない。氏は「はしがき」で「私が直かに経験したことを記録することの方が、ある意味に於ては、（研究的著述よりも）もっと貴重であり、またもしも私が多少世の中にお役に立ち得るとするならば、この方が本当に役に立つのではないか」と控え目に執筆の動機を述べているが、まさにその通りで、文章は生き生きとして清々しく、おそらく氏自身も楽しく書き進めたに相違ない。淡々とした文章の中に氏の人物、美術への造詣の深さ、人種や言語の障害を越えた温い人間愛が感じられ、美術とは無縁のずぶの素人でもスラスラと楽しく読めるのである。楽しく読めるだけではない、繰り返し読んでいくうちに、登場する人物たちを更に知りたくなって関係書を漁り始めているのが実情である。

第一章から簡単に紹介すると、フリーア画廊の創設者チャールズ・フリーアが横浜に上陸して、原三溪や益田孝との出会いから日本美術に魅了されたこと、次いでインドの詩聖タゴールが初来日（大正五年）の際、東洋人初のノーベル賞詩人を朝野をあげて大歓迎したのはよいが、それから横浜三溪園に逗留する間、大学出たての氏が起居を共にしながら通訳にあたり、食事の味加減にとんだ間違ひがあり、その誤解がとけて大笑いする場面など思わず吹き出してしまう。大英博物館東洋部長のローレンス・ピニオンは大の日本品展で、飼犬をゲンジ（源氏）と名づけてかわいがる。源氏物語の訳者アーサー・ウェーレーは地位や名誉に目もくれず、ひたすら翻訳に専念してすぐれた業績をあげたこと、戦前ハーバードへ集中講義に出かけて帰る氏がサンフランシスコからイタリアの駐日大使アウリティと偶然同じ船に乗り合せ、日本美術の洋上特訓をした話、ルーブル博物館長で毛並み最良の紳士ジョルジュ・サルが、ある日、矢代夫妻をぜひにと招いたエッフェル塔中段のレストランでの昼食会で、サルの祖父ジョルジュ・サル・エッフェルが塔の建設者であることを披露したかったらしいこと。

日本美術の最初の恩人回顧では、ニューイングランド出身の三米人、モース、フェノロサ、ピゲローの名をあげ、シアトル美術館創設者のリチャード・フラー館長一家の献身的な奉仕など懐しくもあり、心温まる思いだ。

日本学士院外国会員のサー・ジョージ・サンソムは明治・大正・昭和と長期間滞在するかたわら日本の歴史・言語を研究して日本学の大家となり、終戦直後は極東委員会英国代表として再来日、奈良・京都をこよなく愛した大の親日家、その奈良・京都を空爆から救ってくれた陰の恩人ラングドン・ウォーナー等々、いずれも氏の筆の冴と相まって魅力溢れる人物に描かれ、何度読んでもあきない。これらの人物たちは、ニューイングランドの三米人を除いて、いずれも氏が直に親しく接した人々である。本書を介してその一人一人の事績を辿ることは時間と労力を要するが、楽しく興味は尽きない。一冊の本、つまり本書がこれほど重みのあるものだとは思わなかった。



【編集委員会からのお知らせ】

- ◆ 『英米文化』第21号の目次についての訂正とお詫び
『英米文化』第21号の目次にミスプリントがありました。ここに訂正し、執筆者に御迷惑をおかけ致しましたことを深く陳謝致します。
誤→The Regional Vocabulary of Stone Country, Missouri . . . Itsuo OISHI
正→The Regional Vocabulary of Stone Country, Missouri . . . Itsuo OISHI
- ◆ 『英米文化』第22号の原稿募集
第22号の原稿募集をしています。締切は10月末日ですのでふるってご応募下さい。
執筆要領は以下の通りです。

「英米文化」執筆要項

- 1 内容
 - a) 英語文化にかかわる論文。英米文学、英語学、英語教育など。
 - b) 上記以外に、実践報告、展望、シンポジウム、資料、文献紹介、書評、学会情報、会務報告などを含める。
 - c) 応募論文はすべて未発表のものに限る。
- 2 長さ・形式など
和文論文：400字詰め横書き原稿用紙50枚以内
英文論文：ダブルスペースで40枚程度
 - a) 注は原稿末尾にまとめる。
 - b) 注のノンブルは裸のアラビア数字を用いる。
 - c) 外国の人名、書名等は、著名なものを除き、初出の箇所て原名を書く。
書式の細部に関しては、
MLA Handbook for Writers of Research Papers: Second Edition (邦訳『MLA
A新英語論文の手引 第2版』北星堂 昭和61年)を参照のこと。
論文は、英文・和文ともに200 words 以内の Abstract を添付すること。
なお、和文論文の場合は、英文表題をつけること。
- 3 締切
毎年10月末日とする。
- 4 送付先
学術委員会宛に送付すること (〒362 上尾市原市3590 深井宏一 宛)
封筒に「英米文化原稿」と朱書すること
- 5 原稿審査
応募原稿は学術委員会による審査の上採用。
論文の採否は、12月末頃までに執筆者に通知される。
なお、採用論文のゲラ刷りの段階での修正は、ミスプリント程度とする。
- 6 執筆者には掲載誌5部を贈呈する。
ただし抜刷代は実費とする。

【事務局からのお知らせ】

<住所変更>

弓書房(鷹書房・弓プレス)

新住所 〒162 新宿区水道町 2-14 柴木ビル1F

電話 03-5261-8470 (代表) FAX 5261-8474

セントラル・プレス株式会社

新住所 〒194 町田市鶴間393-13

電話・FAX 0427-99-5772

発行 英米文化学会編集委員会

相良英明、中村襄、池田広子、宮崎敬子、山根正弘、宮本正和

発行責任者

〒158 世田谷区深沢 2-4-9

相良英明